

司式:大隈道雄
奏楽:堀口恵美

前奏:「キリエ、永遠の父なる神よ」(J.B.パッサ)

招詞:もはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。(ガラ3:28)

讃美歌 16「我らの主こそは」

交読詩編 51:1-11

- 01 【指揮者によって。賛歌。ダビデの詩。
- 02 ダビデがバト・シェバと通じたので預言者ナタンがダビデのもとに来たとき。】
- 03 神よ、わたしを憐れんでください/御慈しみをもって。深い御憐れみをもって/背きの罪をぬぐってください。
- 04 わたしの咎をことごとく洗い/罪から清めてください。
- 05 あなたに背いたことをわたしは知っています。わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。
- 06 あなたに、あなたのみにはわたしは罪を犯し/御目に悪事と見られることをしました。あなたの言われることは正しく/あなたの裁きに誤りはありません。
- 07 わたしは咎のうちに産み落とされ/母がわたしを身ごもったときも/わたしは罪のうちにあったのです。
- 08 あなたは秘儀ではなくまことを望み/秘術を排して知恵を悟らせてくださいます。
- 09 ヒソブの枝でわたしの罪を払ってください/わたしが清くなるように。わたしを洗ってください/雪よりも白くなるように。
- 10 喜び祝う声を聞かせてください/あなたによって砕かれたこの骨が喜び躍るように。
- 11 わたしの罪に御顔を向けず/咎をことごとくぬぐってください。

朗読聖書①詩編 103:3-5

- 03 主はお前の罪をことごとく赦し/病をすべて癒し
- 04 命を墓から贖い出してください。慈しみと憐れみの冠を授け
- 05 長らえる限り良いものに満ち足らせ/驚のような若さを新たにしてください。

朗読聖書② マルコによる福音書 2:1-12

◆中風の人をいやす

- 01 数日後、イエスが再びカファルナウムに来られると、家におられることが知れ渡り、
- 02 大勢の人が集まったので、戸口の辺りまですきまもないほどになった。イエスが御言葉を語っておられると、
- 03 四人の男が中風の人を運んで来た。
- 04 しかし、群衆に阻まれて、イエスのもとに連れて行くことができなかったため、イエスがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした。
- 05 イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われた。
- 06 ところが、そこに律法学者が数人座っていて、心の中であれこれと考えた。
- 07 「この人は、なぜこういうことを口にするのか。神を冒瀆している。神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」
- 08 イエスは、彼らが心の中で考えていることを、御自分の霊の力ですぐと言って言われた。「なぜ、そんな考えを心に抱くのか。」
- 09 中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うの

と、どちらが易しいか。

10 人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」

そして、中風の人に言われた。

11 「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい。」

12 その人は起き上がり、すぐに床を担いで、皆の見ていた前を出て行った。人々は皆驚き、「このようなことは、今まで見たことがない」と言って、神を賛美した。

祈祷

天にいらっしゃいます父なる神さま。本日、私たちを礼拝に招いてくださいますありがとうございます。こうして、祈りを共にできますことを感謝致します。

私たちは夫々に生を受けてこの世に生まれ、多くの可能性を持って育ち、あなたによって生まれ、こうして御前にあなたを証しし、あるいはあなたを仰ぎ見て、この礼拝の群れに招かれております。あなたを仰ぎ見つつ歩んで行き、時には迷い、不安と孤独の中に悩み、苦しみを持ってあなたを求めつつ喘いでいる者であります。どうか、私たちが夫々の罪を自覚し、悔い改めることができますようにお導きください。

どうか、私たちが愛と真をもって、隣の人に仕え、周りの人に優しく、そして、この世の中に仕え、奉仕する者でありますようにお導きください。

どうか、あなたの愛と真が、そして希望の光が、まだあなたを知らないこの世の多くの者にも伝えられますように。もし必要であれば、そのために私たちをお用いください。

今日これから御言葉を取次いでくださいます笠原牧師をどうか強め、特別な力をお与えてください。聴く私たちが夫々に相応しい御糧を戴き、持ち帰ることが赦されますように。このお祈りを主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げ致します。アーメン。

讃美歌 149「わがたまたたえよ」

講壇「子よ、あなたの罪は赦される」 笠原義久

“ただ、神の赦しによって、人は生きる根拠と力とを与えられる。”これが、聖書が伝える変わる事のない主張であります。今朝の聖書箇所、『マルコによる福音書』もその事実を記しています。

主イエスの前に運び込まれたのは中風を病む者でした。彼は先ず、病める者であった。病のゆえの痛みや不安や焦りの中で、何とか治ってそのような状態から抜け出したいと願っていたことでしょう。しかしどうにもできない。自分が生きていることを疎ましく思うことも無くはなかったことでしょう。「人々が彼を主イエスの下に運んで来た」とあるように、彼は足腰の利かない自分の癒しを願っても自分では歩いて行けないという状態にありました。私たちはこの中風を病む者に根本のところで助けを与えられるのをただ待つ以外にない私たち人間の姿を見ます。

私たちは神の御前にあつては、どんなに健康で力に満ちているように見えても、この中風を病む者のように自分では、自分の癒しのために何一つ出来ない者として置かれています。言わば或種の破産状態にある。これが私どもの根本の状態だと言えるのではないのでしょうか。

“いや、人間というのはそんな無力でだらしない者ではない。人間はもっと輝きをもった自律的で責任的な存在だ”とそう言うかも知れない。しかし存在の真の深みにおける輝き、鍍金ではない本物の輝きというのは、神の御前に

あって、謂わば、“破産状態にあるような自らの無力さというものを本当に知り、謙虚に自らに求められている生きざまを求め者だけが持ち得る”、そのように言うてよいのではないのでしょうか。

さて私たちが祈る『主の祈り』の5番目の祈り「われらの罪をゆるしたまえ(マテ6:12)、元の言葉では「負債を帳消しにしてください」。私たちはこの祈りを、ただ神の御前にあって破産状態にある者としてしか、あの中風を病む者としてしか、ただ赦しを助け求める以外に何も為し得ない者としてしか、この祈りを祈ることができません。宗教改革者ルターはこう言います。「これは私たちの憐れな惨めな生活に関する祈りだ」と。

主イエスは運ばれてきた中風の者に向かってこう宣告します。「子よ、あなたの罪、あなたの負債は赦される」、そして罪の赦しに見える形として彼を赦し、立たせ、家に帰させます。彼を病から、生きることの敗れや不安や焦りから解放し、自分で立て、自分で考え、自分で決断し、自分で歩く、そういう自立の人へと回復させた。そしてその彼を家へと帰す。すなわち、生きていく交わりの中へ、共同体の生活の中へと彼を帰したのです。そしてこの中風を病んでいた者は“今や、この神の赦しによって新たにされ、人間らしく生きる根拠と力とを与えられた、と言うのです。この事実は、ただあの中風の者に起こっただけではなくて、根本のところ破産状態にある私たちにも、定かに見えないとしても確かに起こっているのだと、そのように聖書は告げています。そして実際この事実は、私たちの全ての者の上に、この世界、この時代の上に起こっているのではないのでしょうか。

神がイエス・キリストによって私たちに与えてくださる「赦し」というのは或る意味「安堵」の出来事です。「安堵」、安心すること、ホッとすること、それまでの生きることへの不安や焦りから解放されて、本当の落ち着きを取り戻すことです。中風の者の癒しに見るように、“あなたは生きてよしい、あなたは生きることが出来る、あなたという存在の根拠と力とは確かである”と、そのように告げられる「安堵」の出来事です。「安堵」という言葉は歴史的には武士や寺がその所領を支配することに対して与えられた法的な確認、保証、というのが元々の意味のようです。

聖書に於いて「赦し」というのは、神が人間と世界に対して、人間と世界が創造されたままなる本来の姿で生き、存続し、神の国を待ち望むことを根拠づけ保証する、そういう出来事、それが「赦し」です。その意味で神の「赦し」というのは、私たちに對する「安堵」の出来事に他なりません。あの中風を病む者は、“罪の赦しの宣告”を受けました。彼はそこで根本的な「安堵」を与えられたのです。彼が自覚したかどうかは別に、そこではもはや、彼が中風を病みつつ生きるのか、それとも治って生きるのかということは、それは根本の問題ではなくなったのです。パウロが『ローマの信徒への手紙』8章で伝えている言葉に倣って言うならば、“私が今苦しんでいるこの病氣も、悩んでいる性格的な欠けも、生まれや育ちも、社会的な制約も、家族関係の不和も、仕事上の失敗や成功も、自分の罪も、この世の罪も、サタン的な勢いも、その他どのようなもの、もはや自分をあの「安堵」から、すなわち神の“然り”、すなわち“よしい、生きてよしい”という、その神の“然り”から元へ引き戻すことはできない。私に「安堵」を与えて下さったイエス・キリストにある神から引き離すことはできない。”この事実を知り、そしてこの事実を生かされる、これが“赦されている”ということではないのでしょうか。聖書に告げられている「赦し」の根本の意味と、そして現実ではないのでしょうか。

聖書で、殊に福音書で「赦し」というふう言うとき、多く用いられるの

は二つの言葉です。一つは「解放する・赦免する」(「アポλύω-ἀπολύω»)という意味を持つ言葉です。もう一つは「棒引きにする・責問しない」(「Αφίημι-ἀφίημι»), そういう意味を持つ言葉です。「赦し」というのはそういうような内容を持つ出来事です。

私たちの負債、即ち罪が棒引きされ、私たちがその足枷から解放されることです。「罪を棒引きされる」、「棒引き」というのは“棒のような線を引く”こと、特に“帳簿などに記載された借金などを、棒を引いて消す”ことです。“ここに引かれた棒線が、他ならぬイエス・キリストご自身ののだ”と、そのように聖書は告げています。ですから私たちは、主イエスによるこの中風の者の赦しと癒しの記事の背後に、“棒引きとなった主の十字架”、それを私たちはここに清かに見ることができるのです。

中風の者は主イエスの“罪の赦し”の宣告によって「安堵」を得ました。先ほども言いましたけれども、そこではもはや病それ自体が癒されるかどうかということは根本の問題ではなくなっています。しかし主はなおも、その病をも癒して下さった。そしてそれは、“人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせるため”だと記されています。

今や主イエスによる「赦し」は、「赦し」という教えは知っているけれども、その事実を知らない者たちに、目に見える形で示されるのです。ここで注意すべきは、“主イエスの罪の赦しは決して病の癒しなしには示されなかった”ということです。もし私たちが、一番肝心なことは罪の赦しであって、体の癒しは二次的な事柄だというふうにごくこのことを読もうとするならば、私たちはこの箇所を読み誤ったことになるでしょう。

ここで見る「赦し」、すなわち「安堵」の現実というのは、この“病む者を病から解放し、本来の健康な状態に回復する”ということでした。“罪の赦し”は彼に對する“生きてよしい・生きることが出来る”ということの根拠と力として告げ知らされました。ここでの「赦し」は、彼を食い尽くそうと取り付き、彼を滅ぼそうとして襲ってくる様々な闇の力を打ち砕き、その拘束から解放放つことです。そして人間として本来立つべき所、あるべきあり方へと立たして下さることです。その本来立つべき所というのは端的には、自分と、そしてこの世界とを赦しの内に存在させてくださる“主イエスに自らの根拠を置く”こと、すなわち“私たちの一切がキリストのものだ”という信仰の中に生きること、“私たちの生活は礼拝者としての生活以外ではないのだ”という、その確認を繰り返すこと、そしてキリストが与えて下さる喜びや望みや力において私たちが立たされている、その現実を目を開くことです。そして“本来のあるべきあり方”というのは、あの“解放を受けられた者として、解放の主に仕え、隣人とこの世にその主を指し示しつつ、また、その主の御業に与る者として、自らも赦しの主に倣って生きる”ということだと思われまふ。

『主の祈り』の一節「われらに罪を犯すものを、われらがゆるすごとく、われらの罪をもゆるしたまえ。」神による私たちの赦しと、私たちの隣人に対する赦しというのは、切り離すことのできない関係にあります。この祈りは“神の赦しを受けつつ、私たちが隣人を赦さないことがないように”という祈りです。私たちは主イエスによる癒しを伴う罪の赦しを、一度決定的に、そしてまた繰り返して与えられていることを知り、またそれを知るゆえに、その赦しが繰り返して与えられるよう祈る者たちです。そうであればこそ私たちに、“我らに罪を犯す者、負債ある者を赦すことが出来るように”という祈りと、そしてその働きが私たちに求められています。

それにしても、“私たちに負債ある者を私たちが赦す”、これは一体どのような

ことなのでしょう。私たちが為す赦しというのはいったい何でしょうか。私たちに主イエスが与えて下さったのと同じ質を持つ赦しを為すことは出来ません。罪を赦すことのできる方・救い主はただお一人主キリスト以外にはない。私たちに求められている隣人に対する赦しは、ただ主イエスの私たちに對する赦しの反映に過ぎないのです。“私に對する赦し、隣人である彼・彼女に對する赦しは、既に主イエスに於いて決定的な形で興っている”、この信仰の認識こそが、私たちが「赦し」という場合の基礎となっているのです。「キリストはその兄弟姉妹のために死んでくださったのです(ロマ 14:15)」。私たちの隣人、その誰彼もまた、主の赦しの中にある者、その赦しが彼・彼女の上に形をとるように労するということが、私たちの為す「赦し」ということではないのでしょうか。私たちに求められている「赦し」というのは、互いに赦され、生かされている者同士として相手を見、相手を生かす道を考えるということでしょう。「赦し」は私たちに對して、あの中風の者にとつてそうであつたように端的に喜びの出来事です。私たちの「赦し」は、その喜びへの喜ばしい応答に他なりません。このような他への「赦し」に労苦することにおいて、自らに与えられている「赦し」も、更にはっきりと見えて来ることでしょう。

それでは“私たちに罪を犯す者、私たちに負債ある者”とはどのような者のことを言うのでしょうか。それは私たちに面倒を掛ける者、私たちにトラブルに巻き込む者のこと、私たちの手を必要とする者のことであります。それはごく身近な家族であつたり、友人であつたり、職場などの一つの集団、さらに広げれば社会や国家の組織であつたりすることもあるでしょう。そもそも私たちが生活する者として生きていくとき、トラブルなしであることは出来ません。家族の間の小さな感情のもつれから発し、更に社会的に例えば人間として生きる権利のための主張や抗争、そしてそこで出て来るトラブルを避けることは出来ません。しかしここで問題の所在は、トラブルそのもの、あるいはトラブルが存在しているところにあるというよりは、自らをも含めてそれを引き起こしているものにどのように對処するかということの内にあります。互いの過ちや不義、憎しみや差別、排除の意思が増幅する中では、あるいは互いの無関心や逃げが支配する中では、トラブルの泥沼化が起こるだけです。このような中で、自らと、そして他者の上に与えられている神の赦しが、そのような私たちに本来の立場、あり方へと回復する、その「赦し」が形をとるように労すること、そのことへと私たちは招かれているのではないのでしょうか。

「我らに罪をおかす者」、『主の祈り』にあるこの言葉、我らに罪をおかす者は、自らをも含めて至る所にいます。“そこで赦しを生きる”、それが、この祈りを祈る者の生き方となるでしょう。

『主の祈り』は、世界のための教会の祈りです。我らの負債・罪の赦しを祈るこの祈りも、世界のための教会の祈りです。私たちが主によって既に赦され、また繰返し赦されつつある者として、その「赦し」を、自らの生活の中で、またこの世、この時代に生きるということ、そして「赦し」の主を指し示すということ、これは確かに私たち自身のための祈りであると共に、世界のための私たちの祈りです。

今日、この世界が、どれほど主イエスによる罪の赦しを必要としていることか。主イエスによる「安堵」、生きる根拠と力と方向とが与えられるということとどれほど必要としていることか。私たち自身のことを考えても、教会のことを考えても、身近にある人々のことを考えても、そしてまたこ

の社会の成り行きを考えても、誰一人として、どれ一つとして、「赦し」による解き放ちと新しい生とを必要とはしない者はありません。教会はこのようにこの世のために、『主の祈り』を祈り、そして『主の祈り』を祈る者として働く、そういう者の群れであるということを、決して忘れてはならないと、そのように思います。

主イエスは私たちに、「子よ、あなたの罪は赦される」と、今も語っておられます。そして「起き上がり、床を担いて家に帰りなさい」と、そのように命じ、勧めておられます。私たちは今、共に、改めて、この罪の赦しの宣告と、その赦しを生きるべく私たちに遣わす主の派遣の御言葉を聴きたいと、そのように願う者です。祈禱献げます。

主よ、語りました言葉をあなたの聖霊の働きによって活ける命の言葉にしてください。この時間の中で、御言葉が私たち全てを慰め、勇気づけ、励まして下さること。そして、そのことが私たちの間に、近くや遠くのありとあらゆる場所に起こるよう切に祈り願います。

主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讚美歌 469「善き力にわれかこまれ」

献金・感謝・主の祈り(二神康郎)

私共の造り主にして、救い主なる天の御神さま、感謝致します。今日も、健康を支えられ、各家庭で、また礼拝堂で、御前に召され、講壇を通して貴重なお話を賜ることができました。「子よ、あなたの罪は赦される」と題した笠原先生の今日の説教では、神の赦し無くして、私どもは生活することができないことを示されました。その言葉をこれからも私たちは胸に刻み、毎日の生活を送っていくことができますようお願い致します。

只今献げました宝の一部を、どうか教会のご用のためにお使いください。

イエス・キリストによって示された『主の祈り』を共に祈り、これからの1週間を始めさせてください。…『主の祈り』…アーメン。

派遣：讚美歌 91「神の恵みゆたかに受け」

祝福：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の清き親しき交わりとが、あなた方と共にとこしなえにあるように、アーメン。

報告：(1)週報記載 7/21(月)祝部解放祈りの日礼拝案内、(2)廃棄前教会文書頒布の案内

後奏：「我らに救いの来たるは」(J.S.バッハ)